～ 座談会 ～

「なぜ開く?」「どう開く?」高校が地域社会と連携・協働する意義

これからの社会を生きていく生徒が必要な資質・能力を共に描き、育むうえで、地域社会が果たす役割とは何か。高校、教育行政、大学／地域と、立場の異なる3人にお集まりいただき、高校が地域社会と連携・協働していくことの意義や、具体的な一歩を踏み出す際のヒントについて語り合っていただきました。

――本日、ファシリテーターを務めさせていただきます中村です。高校で世界史を教えていましたが、離島への異動がきっかけで、地域と共に生徒を育む意義を知り、今は島根大学教職大学院で地域連携型教育などについて研究しています。皆さんも地域の教育力に期待している点は同じだと思います。自己紹介を兼ね、そうした考えに至った経緯をお聞かせください。

佐々木 私は映画の仕事や予備校勤務などを経て29歳で都立高校の教員になりました。担当する国語の授業では、生徒が自身の解釈を示し、対話を通じて互いに批評できる力が育つように心掛けてきました。以前、参加していた学外のアクティブ・ラーニングの交流会では教員以外の方々から多くのアイデアを頂いたこともあり、生徒にとっても多様な大人に出会うことで学びが広がると思っています。そこでここ数年来、学外からいろんな方を招いて授業をしてもらったり、生徒が外へ出て学んだりする機会を少しずつつくってきました。例えば地元の青年会議所とコラボし、高校生が見つけた日野の魅力を発信するCMをつくる授業などです。さらに今年度は1・2年生有志と、日野市などと連携して「持続可能な日野の未来をつくる研究チーム」を立ち上げました。

内堀 私は高校現場と行政の行き来が多く、上田高校の校長を最後に退職した今は、4度目の県教委事務局で高校改革推進参与として働いています。地域連携といえば、20年近く前、改訂間もない学習指導要領を現場につなぐ業務をしていたとき、そのベースとなった平成8年の中教審第一次答申に「開かれた学校」という文言があったことを覚えています。「連携・協力」という言葉を用いて、学校は、家庭や地域社会と共に子どもたちを育てていく必要があると書かれていました。画期的な答申だと思いながら、授業公開や学校評議員制度、学校自己評価などの仕事に携わり、その後も一貫して地域と連携・協働した教育を進め

取材・まとめ／堀水潤一　撮影／平山 諭

地域の大人との触れ合いが、人生における自分の役割に気づくきっかけに

てきました。今回の改訂では改めて「社会に開かれた教育課程」が謳われていますが、今に始まったことではないと感じる一方、近年は「連携・協力」という形式的に陥りがちな関係を超え、「協働」という地域と一体になって生徒を育むといったニュアンスをもつ言葉が、各地で使われていることに質的な変化を感じています。

岡崎 東京で雑誌編集者をしていましたが、まちづくりを支援する団体の代表との出会いをきっかけに、拠点を栃木に移し、日本各地で住民参加型のまちづくりを手伝ってきました。2014年からは東北芸術工科大学に新設されたコミュニティデザイン学科で教鞭をとっています。地域といっても、人や歴史や資源など一つとして同じものはないため、先行事例を真似してもうまくいきません。当事者となって試行錯誤しながら、考え、気づき、課題解決のプロセスを通して、自己変容していく必要があります。そのため学生は地域の方々と1年半にわたって活動を共にします。そして例えば「どうすれば、住民同士がチームになって活動できるのか」といった疑問に対して、「勇気をもって自己開示し、互いの強みと弱みを理解し、補完しあうことが大切」といったことを体験的に学んでいくのです。教室で概念的なことを学ぶだけでは育たない資質・能力を、現場で身につけられるようにしています。

テーマ1 なぜ高校は、地域社会に開かれる必要があるのか

——皆さん、実体験を通じて地域の教育力を実感した経緯がわかりました。「真正の学び」（16ページ参照）という言葉もありますが、生徒がリアルな学びに触れる意義についてお聞かせください。佐々木先生は、授業に劇団員を招くとのことですが何が変わるのでしょう？

佐々木 例えばアーティストの方々は、教員がキャッチできない生徒のちょっとした良さをつかんで褒めることが多いようです。生徒は最初「えっ、そんなことが褒められるの」と戸惑うのですが、そのことで自分や友達の良さを発見します。また、教員以外の大人が教室に入ると、空気感が少し変わります。いつもは周りを気にして省エネ的にその場を過ごす感じが強いのですが、自分なりにジャンプしようという空気が生まれます。

内堀 真善美と言われるように、本物や美しい物がもつ説得力って間違いなくありますよね。昔は、高校生が高校の外にある本物と出会う機会は少なかったけれど、今はネットなどを通じて、自分の周りに学校にはないさまざまなリアルな物があることを知っています。一方で、高校になると授業はますます概念的・抽象的なものになり、具体とのギャップが広がっていく。そうした状況で、「なぜこの勉強をしなければならないのか」という疑問が生じるのも無理はありません。今の学びが現実社会や自分の将来とつながっていることを実感するためにも社会との関わりや多様な社会体験は有効だと思います。

佐々木 学校での学びって、どうしてもシミュレーション的になりがち。ディベートや小論文でもそうで、社会問題をテーマにしても教室で完結してしまってリアリティがありません。対して、社会に解き放たれると、「あっ、俺はこういうことがしたいんだ」「自分は何て無力なんだ」と実感できる可能性があります。思うに「深い学び」って、

東北芸術工科大学
コミュニティデザイン学科長
岡崎エミさん

おかざき・えみ●学習研究社婦人誌編集部、雑誌編集長などを経て、2009年、拠点を栃木県に移し、studio-L MOTEGI創設。海士町総合振興計画の別冊編集ほか、全国各地で住民参加型のまちづくりに関わる。14年4月より東北芸術工科大学デザイン工学部コミュニティデザイン学科准教授。現在同学科長。高校生の地域参画を推進するため、高校・行政・民間NPOがセクターを超えて対話するSCHシンポジウム（次回は2月23～24日に東北芸術工科大学で開催予定）の運営にも携わる。「2019年度地域との協働による高等学校教育改革推進事業 企画評価会議」協力者。

今までもっていた世界観が揺さぶられたときに起こるのでしょう。そのためには、本物の課題と「マジ」にぶつかることが有効だと思います。

内堀 もう一つ、リアルに触れる意義は、学びそのものの楽しさを実感しやすいことです。残念ながら私の高校時代は講義型の受験対策が基本で、授業や受験勉強が面白いと思ったことはあまりありません。中には、学問の楽しさが垣間見られる授業もありましたが少数派。教科書をなぞるだけ、受験に備えるだけでは授業は面白いはずがありません。その点、リアルな学びは、「学ぶ理由」や「学びの楽しさ」とシンクロしやすいと思います。

岡崎 現在、私がカリキュラム等専門家として支援している山形県の高校での話です。ある大人しい生徒が、全国小規模校サミットというイベントのコアチームに入りました。真夏の開催で熱中症が心配されるなか、彼女は救護班として活動しなければならず、先生から「消防署に行って対策を聞いてきたら」とアドバイスを受け、それを実行しました。プロから学んだことで自信がついたのでしょう。イベント前日「大丈夫？」と声をかけると、「バッチリです」という返事。その後、学校に案内がきたすべてのボランティアに参加するまでに変容しました。地域の人には、教員とは違う力があるんだと思いました。

長野県教育委員会事務局
高校改革推進参与
内堀繁利さん

うちぼり・しげとし●長野県内の高校教諭、長野県教育委員会事務局、軽井沢高校校長、上田高校校長などを経て、2018年4月より現職。学びの改革を中心に県内の高校改革を推進。中央教育審議会「新しい時代の高等学校教育の在り方ワーキンググループ」・「通信制高等学校の質の確保・向上に関する調査研究協力者会議」委員。「2019年度地域との協働による高等学校教育改革推進事業　企画評価会議」・「全国高校生フォーラム2019」協力者。高校生がプロジェクト学習の成果を発表する「マイプロジェクトアワード」審査員等も務める。

テーマ2 どうすれば、高校は地域社会に開かれるのか

――学校が地域社会に開かれることが大切だとして、では、第一歩をどのように踏み出せばいいでしょうか？

佐々木 私の場合「この人なら信頼できる」という個人的なつながりから始めます。正直に言えば、校内調整でストレスを抱えたくないし、個人的にワクワクすることから始めたいのです（笑）。組織としての仕組みにどう落としこめるかをちゃんと考えるのは後から。「学校のために」とか、「地域のために」という発想ではなく、まずは「生徒のために一緒にやりましょう」くらいがいいと思うんです。もちろん校長とはあらかじめすり合わせたうえで。まずやってみて形が見えると評価してくれる学外の人たちが出てくるし、学内でも「いいんじゃない」という人が出て、仕組みになっていくという感じです。

内堀 実際の社会におけるつながり方ってそんな感じですよね。最終的には組織対組織という関係で物事を進めるとしても、初めからそこを目指していたら動きはにぶくなるばかり。個人的なつながりのなかで、「生徒にこういう力をつけるためにこんなことをしたい。ついては、今度、連れていっていいですか」くらいから始めるのがいいのではないでしょうか。

岡崎 一見、教育に無関心そうな地域にも、地域のため、子どもたちのため、と汗をかいてくれる人は必ずいます。そういう人を発見するためにはヒアリングをすること。先生自ら地域に出向き、これからの教育のあり方を語り、生徒を共に育てるという目的を共有しつつ、住民から地域の魅力と課題も聞き出す。互いの接点を見つけることが出発点になると思うのです。

――そうやって個から組織へ発展したとして、持続可能な取組となるために大切なことは何でしょうか？

佐々木 メインで動いている人が、一人で抱えこまず、次に続く人たちにバトンを手渡すことだと思います。

子どもたちは常に社会とつながっている。学びもまた社会と切り離されるべきではない

まずは個と個のつながりから。ワクワクすることから始めればいい

東京都立日野台高校
指導教諭
佐々木 宏さん

ささき・ひろし●映画の助監督や予備校動務などを経て教員に。教科は国語。演劇部顧問。現在2学年担任。授業に演劇的手法を取り入れるなどアクティブ・ラーニングの活用に積極的。生徒の学びと社会とのアクセスポイントを多様な形で創り出すため、学校がある日野市を中心に多摩地域で、学校の枠を超えて自治体、企業、NPO、大学、保護者等と連携した授業や事業を進めている。

内堀 組織の持続可能性を生むには、「当事者意識」に加えて「仕組み」が必要。学校と地域との協働体制をつくるためには、関係者の意識改革を促しながら、コンソーシアムなどの仕組みを構築し、活用することが重要です。

岡崎 私たちのような第三者がまちづくりに携わる際、よく「穴だらけの風呂敷を広げろ」と言われます。隙のない提案をすると、「そこまでできているんだったら、あなた方でやってよ」となりかねません。けれど穴だらけだと「提案自体は面白いね。ただ、ところどころおかしな点があるので、俺たちも一緒にやらないとダメだな」となる。当事者が役割を果たすことが重要であり、例えば農家のおばあちゃんが「私も高校生の成長に一役買っている」という自覚をもてば、地域力の底上げになります。「連携・協力」から「協働」レベルになるためには、関係者全員の当事者意識が不可欠です。

内堀 地域協働はあくまで手段。地域と協働することで何ができるのかを地域と共によく考え、育てたい生徒像を共有しながら、行動に移すことが大事です。そういう意味で補足したいのですが、「地域」連携や「地域」協働というと、その響きから都市部の高校は関係ないように感じられるかもしれません。しかし、リアルな学びに触れることの意義は、全国どこの高校でも同じ。大切なのは地域「社会」との連携・協働です。

佐々木 仰る通り、地域とはその学校が所在している社会のこと。昔であれば、そこに濃密なコミュニティが存在していましたが、今は希薄。特に都市部はそれが顕著です。本校の生徒の多くも学校のある日野市について何も知らずに卒業していきます。本来その立地や条件ならではの教育ができるのに、もったいないことだと思います。

岡崎 都市にしろ地方にしろ、自分が生きている世界とつながり、具体と抽象を行き来することが重要です。ただ、都市部と比べ、地方には自然資本が多いことが特徴。空気や水を生み出す森や、食べ物を生み出す田畑なくしては経済も社会も成り立たず、人として生きていけません。根源的なところからアプローチできる地方の高校は、学びの環境が整っていると私は思っています。

内堀 教育に携わる人たちの最大のモチベーションは、やはり生徒の変容。子どもたちの目の輝きを目の当たりにした大人はさらに前に進めると思います。教育実践が広がりを見せるうえで、生徒の成長は絶大な説得力です。

——他に、地域の立場から、高校に伝えておきたいことはありませんか？

岡崎 最初は個のつながりから始めるとしても、地域との協働が具体的な話になってきたら、その後のフェーズをきちんと共有することが大切です。例えば、市町村の職員は計画にそって動くため、総合計画や教育大綱の中に「高校が地域づくりの重要なパートナーである」という文言を明記すること。担当部署をはっきりさせることも大事です。今後、国や自治体から施策がもちかけられることもあると思いますが、その際にも行政の仕組みを知っておくと無駄な体力を使わずに済むと思います。また、地域の人は学校文化を、先生方も地域の実情を知りません。互いに戸惑うことも多いため、できれば最初の数年は、双方の

文化に精通したコーディネーターに入ってもらい、形を整えてもらうと少し楽になるはずです。そのうえで、チームビルディングを行い、仕組みを整えながら、意識と行動を変えていくことが必要だと思います。

テーマ3 社会に開くことで訪れる子どもたちの未来とは

――そうしたプロセスを経て高校が社会に開かれたとして、生徒にどのような変化が生じるでしょうか？

佐々木 これからの社会を生きる生徒に必要なのは、既存のシステムへの適応力ではなく、新しい社会をつくろうとするマインドだったり、自分なりの幸せの形を見つける力だと思います。一人ひとり描く社会も人生も違うし、社会に解があるわけでもない。偶然性にも委ねられる。そんななかで学校の先生や友達じゃない人と出会い、一緒に何かに取り組むなかで、自分の良さや、やりたいこと、足りない力に気づくんじゃないでしょうか。

内堀 誰しも自分の幸せを考えていると思いがちですが、意外とそうでもなくて、高校生くらいの年代はまだ人生の当事者という感覚すら希薄な生徒もいます。そのうえで、大切なのは、自分だけではなく、他者の幸せをどう捉えるかということ。地域社会とのつながりを通じて、自分を見つめると同時に、社会貢献意識などが生まれることを期待したいですね。

岡崎 同感です。自分はどう生きていくかというとき、個人の幸福も大切だけれど、環境問題など、皆で取り組まないと解決しないことに、自分も当事者としてつながっていることに気づくことが大切だと思います。その点、地域との協働は、「競争」よりも「共存・共栄」のほうが大切であることを実感するいい機会。そのために今、どういう力を身につける必要があるかを考えることにもつながると思います。

内堀 子どもたちは学校にいる時は生徒という立場でも、実は社会の一員です。子どもたちが学校の中でだけ学ぶこと自体、そもそも不自然なことだと思いますし、一人の人間、社会の一員として連続しているのに、学校という枠組みの中でだけ、社会と乖離した別の価値観と尺度で評価するあり方はもっと違うだろうと思っています。

佐々木 学校ってどうしても、勉強やスポーツができるかで評価をされがち。教室では、人との微妙な距離感のなかで生き、仮面を被っているような生徒も少なくない。外で活動しているときに見せる表情はこれとは対照的です。

内堀 これからの学校のあり方として、まずは個々の子どもたちを起点として学びをつくることが大事だと思います。そして、あらかじめ大人が決めた尺度に生徒が合わせるのではなく、子どもたち自身が、自分の人生の主体として、自分の中にそれぞれの価値基準・評価基準をつくり出すことができればいいなと思っています。そのためには、行動や結果を否定するのではなく、失敗しても、むしろチャレンジしたことを褒める文化を学校の中でつくる必要があると思っています。

岡崎 Society5.0を目の前に、「今後どう生きていくか」「今、何をすべきか」を考えなくてはいけないのは地域の大人も同じ。だからこそ、未来の主人公である高校生と対話することは意味があるのです。

佐々木 この先、どんな社会をつくっていくか。そのために自分はどう生き、どういう力をつけるべきか。そうしたことを、生徒と大人が対等の関係で考えるって、とてもワクワクすることのはず。生徒の可能性をぐっと広げるためにも、そうした開かれた学びの場をたくさん用意していきたいですね。

――本日は、ありがとうございました。

リアルな場だからこそ浮き彫りになる学校での学びの意義や自己のあり方